column 大久保コリアタウン

2010年11月に私は『池袋チャイナタウン』(洋泉社)という本を出した。しかし，私が最初に注目していたエスニックタウンは池袋チャイナタウンではなく，大久保エスニックタウンであった。1980年代終わりころから，JR山手線新大久保駅から歌舞伎町に近い職安通りあたりに韓国人，中国人，タイ人などのアジアからのニューカマーの集住がみられるようになった。同胞相手の各国料理店ができ，東南アジアや中国の研究をしていた私は，日本化していない現地の味のメニューには，なつかしさを覚えて通った。

当時，この地区はまだコリアタウンではなかった。1996年にこの地区を調査したが，106軒のエスニック系店舗のうち，韓国系50軒，中国系30軒，東南アジア系16軒などとなっていた(山下清海・秋田大学地理学研究室学生，1997)。私は，この地区を「大久保エスニックタウン」とよんだ。

この地区に大きな変化の波が押し寄せたのは，2002年であった。この年開催されたサッカーの日韓共催ワールドカップでは，韓国系の店舗が多いこの地区が，テレビ報道の格好の舞台となった。テレビリポーターは，「コリアタウン」の呼称を多用し，大久保コリアタウンの知名度は全国区となった。その翌2003年には，韓国のテレビドラマ「冬のソナタ」が日本で放送され一気に韓流ブームとなり，大勢の観光客が訪れるようになった。韓国料理店や韓流スターのグッズを扱う店などが急増する一方で，中国人経営の店舗は目立たなくなった。中国人ニューカマーの中心は，池袋チャイナタウンに移ってしまったのである。(山下清海)

JR新大久保駅近くの韓流スター関連の店
韓流人気で多くの日本人が訪れる。(大久保通り)
(2010年5月，筆者撮影)